あとがき

みなさま、このたびは京都大学藤子不二雄同好会の展示にお越しいただき、ありがとうございました。この場をかりて、改めてお礼申し上げます。

藤子不二雄同好会は、その名の通り、藤子不二雄作品を愛するメンバーが集まり、上映会や藤子作品談義をして、時には本誌にも掲載したように藤子作品関係の旅行や他所の愛好会の方々と交流する、というサークルです。

このような、ある作品や作家の愛好会というものは、あらゆる分野において存在するでしょう。しかし、その中でも私たち京大 F 同がテーマとしている藤子作品の特徴を挙げるならば、その圧倒的な知名度ではないでしょうか。

現在でも『ドラえもん』は毎週金曜日のゴールデンタイムに放映されているアニメであり、そうかと思えば既にアニメ『ドラえもん』を観て育った世代が親となっています。さらにそれ以前に遡れば『オバケの Q 太郎』や『パーマン』のブームがあり、たとえ今は興味をもっていないとしても、ほとんどの人が一度は何らかの形で藤子不二雄作品にふれたことがあるのではないかと思います。

そのことは、ともすれば私たち熱心な（と自分で言うのもなんですが）ファンにとっては、疎外感の原因にもなります。あまりに親しまれすぎた作品だからこそ、なかなか「ドラえもんを熱く語る人」というのは居場所がないものです。しかし同時に、こうして多くの方に開かれた大学祭の場で、小学校入学以前の子どもから恋人同士のおしゃれなカップル、さらには年配の方までもが「あ、ドラえもんだ！」「えー、ドラえもんこんな話もあるんだ」「ああ、懐かしいね」と言ってこの展示に立ち寄り、本誌を手に取り、時には会員と言葉を交わしてくださいます。それもまた、藤子作品がこれほどまでに親しまれていればこそではないでしょうか。

本誌合宿記にも書いたことですが、当会はこの夏、東京旅行の途中、藤子・F・不二雄先生の霊前に挨拶をさせていただきました。その際、この漫画家がいなければ自分たちが愛する作品が生まれることはなかったということを感じると同時に、この同好会を通じた友人関係もなかったのだ、ということを強く感じました。こうして藤子作品を楽しみ、藤子作品を通してこの大学の同好会の仲間たちと出会え、そして本誌を手にとってくださったみなさまと一時でもふれあうことができたことに感謝し、今年度会誌のあとがきとさせていただきたいと思います。

京都大学藤子不二雄同好会　井関竜也